

串田純一著 『ハイデガーと生き物の問題』 合評会について

陶久明日香 (成城大学)

串田純一氏の『ハイデガーと生き物の問題』(法政大学出版社、2017年)は、2011年に提出された串田氏の博士論文を下敷きとしつつ、その後の氏の研究成果をも盛り込んだ仕方で仕上げられた研究書である。串田氏の試みは、ハイデガーの講義録『形而上学の根本諸概念』(1929/30年冬学期講義)や、『アリストテレス、『形而上学』θ1-3』(1931年夏学期講義)などの読解をもとに、ハイデガーの思索を「生き物」についての究明という観点から読み直し、さらには「言葉を持つ生き物」としての現存在のあり方を問うというものである。ハイデガーの思索における「動物」の問題や、「気分」、「能力」、「言語」、「詩作」といった事象の内実ならびにそれらの内的連関について究明したこの画期的なモノグラフィーの内容を詳細に検討し、議論するために、2018年7月29日(日)に立正大学品川キャンパスにてこの書の合評会を行なうこととなった。評者にはハイデガーの言語論や気分論に造詣が深い東京大学の古荘真敬氏と、フランス哲学の研究でも活躍されている甲南大学の川口茂雄氏が選出された。当日は、まず串田氏が著作の要点を各章ごとに説明し、そのあと川口氏によるコメント、続いて古荘氏によるコメント、そして串田氏による応答が行なわれた。以下、両評者のコメントの概要を示しておく。

古荘真敬氏のコメントは、串田氏の本に頻出する「為さない必要がない」ないし「不必要性」という事象をめぐるものである。串田氏はこの事象を、アリストテレスのメガラ派批判に関するハイデガー解釈をもとにして引き出してくるのであるが、古荘氏はハイデガーによるアリストテレス解釈を丹念に読解することを通じて、串田氏が提示する「為さない必要がない」という事象と、ハイデガーが本来意図していた内容との間にはズレがあるということを指摘する。しかしそうした氏の解釈を誤解として退けるのではなく、なぜ串田氏が「為す必要も為さない必要もない」という、現存在に特有な「不必要性」にこだわり、それを人間的現存在の能力一般の可能性の条件として提示するにまでいたるのか、その根拠を積極的に追求することを通じて、たんなるハイデガー研究に留まらない串田氏の論究の独自性、ならびにその洞察の核に迫っている。

他方、川口茂雄氏は、串田氏が「脱抑止」という事象に徹底的に注目したということや、「退屈」について「可能性」からの観点からの深い解釈を試みたこと、またリルケの詩と動物論との関わりについての洞察を提示したことなどを積極的に評価しているが、その一方で、串田氏が著

書にて論じ切れていない重要な問題点も提示している (たとえば「形而上学の二重性」における「存在論」の位置づけ、ハイデガーにおける「超越論的」という語の具体的内実についてなど)。さらに串田氏の本の内容とリクールの『意志的なものと非意志的なもの』(1950年)における思索との間に共通点を見出し、両者の比較を試みてくれたということも、参加者にとっては刺激的であったと思われる。

両評者と串田氏によるセッションのあとは、フロアを交えての全体討議のために30分ほど時間を設けた。この全体討議においてはたとえば、動物も人間も「生き物」と言えるのは、両者とも「衝迫の脱抑止」という概念で捉えられるからだという串田氏の主張に対し、「人間は世界形成的」と言われるときの「世界形成」に「衝迫の脱抑止」という概念は使えるのだろうかという質問が挙げられた。また「様相論理」に対する「能力論理」を展開することの必要性を説く串田氏に対し、この点はより主題的な哲学的検討が必須であるというコメントとともに、「様相論理」と「能力論理」をめぐる質問(「能力論理」は、「様相論理」を単に補完するものであるのか、むしろ、「様相論理」に対して何らかの意味で先行したり、より基礎的な地盤を提供するものであるのか?)なども挙げられた。ハイデガー研究者にとどまらず、哲学の他の分野の専門家の方、また一般の方にもご参加いただくことができ、あらためて串田氏の著書の射程の広さを感じさせられる会となった。

Asuka SUEHISA

***Introduction to the Meeting for Reviewing:
Junichi Kushida's Heidegger and the Problem of Living Beings***